

駿河湾の深海魚 (20)

ホクヨウハダカ

久保田 正

ホクヨウハダカ (*Tarletonbeania taylori*) は、ハダカイワシ目、ハダカイワシ科魚類のホクヨウハダカ属に属する2種の中の1種です。その分布は、北海道太平洋沖から本州銚子沖、さらに駿河湾を含む西部北太平洋の亜寒帯海域から知られています。

化して親潮の卓越によって、その時期だけに流れに運ばれるように湾内に入り込んだ本種が湾内の三保海岸まで到達し打ち上げられたと考えられます。また、その付近の波打ち際にはハダカイワシ科のウスハダカ (5 個体)、ヒサハダカ (1) さらにヨコエソ科のヤベウ

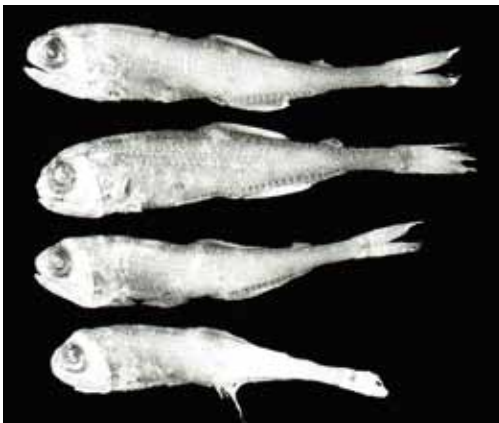


図1 駿河湾の三保海岸に打ち上げられたホクヨウハダカ (4個体)
1971年3月21日採集
久保田 (1972) から引用

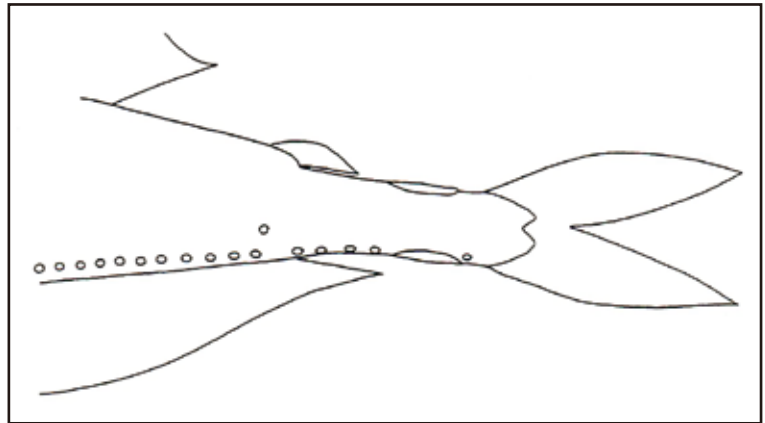


図2 本種の雄の尾柄部 (上部と下部) 発光腺の形態
上部と下部の両方にある (雌は両方に無い)
尾鰭の上葉と下葉が細長いのが特徴
Wisner(1976) から引用

本種は、昼間水深 150 ~ 500m 層を中心に生息する中深層性種として知られ、夜間に表層へ浮上する海面上層群の1種です。体は側扁し、尾柄部はかなり細長く、鱗は櫛鱗であり、側線は不明瞭です。体長は約 70mm に成長します。

また、本種は亜寒帯海域にすむ固有種ですが、駿河湾もその分布域に入っています。駿河湾内で生活していることはとても考えられない種ですが、一度だけ湾内で採集された記録があります。本報告では、最初にそのことについて触れたいと思います。

駿河湾の三保海岸に 1971 年 3 月に打ち上げられた 4 個体の採集が最初で唯一の記録です (図 1)。その体長範囲は、24.8 ~ 31.2mm の未成体の個体です。亜寒帯性の本種が、何故この時期に湾奥の三保海岸に打ち上げられたかの原因は、次のように考察しています。

1971 年は過去 2 年と比べて冷水塊の規模が大きく、低温は相模湾のほか駿河湾にも影響を与え、しかも黒潮の流れは南下し、弱体

キエソ (3)、キュウリエソ (1) などの魚類も採集されました (久保田, 1972)。このように本種が、黒潮域に分布する中深層性魚類とほぼ同じ場所で採集されることは極めて珍しいことです。

次に、尾柄部にある二次性徴の発光腺について述べます。一般的にハダカイワシ類の尾柄部の発光腺は、ある大きさになって発現し、成長と共に徐々に完成します。本種の雄には尾柄部上部と下部両方にそれぞれ 1 個を有していますが、雌はその両方にありません (図 2)。

東部北太平洋の亜寒帯海域に分布の中心がある近縁種の 1 種、*T. crenularis* の雄の発光腺は本種と同じように上・下部の両方に 1 個ありますが、特に上部の発光腺が脂鰭の後端付近から尾鰭の始部付近まで長く伸びているのが特徴です。そして雌には上・下部に共にありません。

本科魚類に見られるこれらの発光腺の存在は、雌雄や属レベルに多様性が見られ、この形質により属や種の識別を行うことも出来ます。